平城宮跡資料館
リニューアルの一年

図１　宮殿復原展示コーナー

図２　遺物展示コーナー

１　はじめに

2010年に平城宮跡および奈良県一円で開催された「平城遷都1300年祭」（以下1300年祭とする）にともない、当研究所では2010年４月24日に平城宮跡資料館をリニューアルオープンし、様々な企画展を実施してきた。本稿では平城宮跡資料館のリニューアル準備段階からオープン後の活動を振り返り、今後の学芸業務の参考としたい。

２　リニューアルへの取組み

基本構想　所内で展示委員会を編成し、2009年度初頭の委員会で、平城宮跡資料館（以下資料館とする）は、①平城宮跡北側からのアクセスに対する受け皿、②平城宮跡のガイダンス施設、の役割を担うことを目的とし、常設展示は、「インフォメーションルーム」「ガイダンスコーナー」「官衙復原展示コーナー」「宮殿復原展示コーナー」「遺物展示コーナー」からなる展示構成が決定した。

展示方針　展示計画にあたり、以下の点を心がけた。

①「わかりやすい」展示を目指す：平城宮を知らない初めての来訪者にも理解できるように、模型・ジオラマ・映像を効果的に取り入れ、イメージしやすいようにした（図３）。官衙・宮殿復原展示コーナーでは、役所と宮殿の内部を実物大のジオラマで再現し、正倉院宝物を参考にした調度を置いた（図１）。解説文は平城宮の概略紹介に努め、難解な専門用語や複雑な詳細内容は避けた。

②平城宮の展示に特化する：将来、国土交通省によって平城宮・京に関する展示館が設置されることを想定し、資料館は平城宮跡のガイダンス施設として、宮内の内容を展示することに重点をおいた。寺院関係や長屋王など、旧資料館にはあった京内の詳細な解説事項は、あえて省いている。

③実物資料を展示する：実物資料を間近に見ることで、奈良の都や当時の人々の息吹を実感できる。生の資料

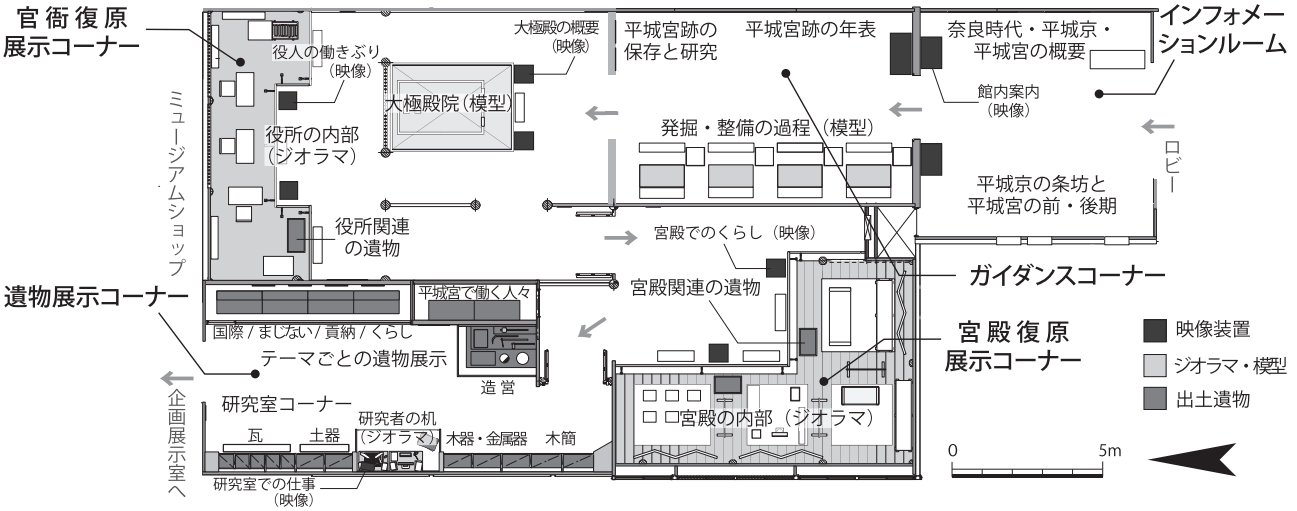

図３　平城宮跡資料館改修後平面図（常設展示部分）

図４　夏期企画展のようす

図５　秋期特別展のようす

は、レプリカにはない魅力を持っている。そこで遺物展示コーナー（図２）には、当研究所の発掘調査で出土した遺物を展示した。また官衙・宮殿コーナーでは、ジオラマの中に関連遺物を展示し、対比できるようにした。

④奈文研管轄の資料館としての特色を出す：「奈文研ならではの資料館」を意識し、他の歴史系博物館・資料館との差別化をはかるため、遺物展示コーナーに研究室コーナーを設けた。ここでは、遺物を歴史のテーマや内容に沿って展示するのではなく、木簡や木器・金属器、土器や瓦、各々の研究室が遺物をどのような視点で分析し研究しているのか、実際の遺物を交えて解説した。

３　企画展あれこれ

リニューアルオープン後、資料館では2010年度中に４つの企画展を開催した。ここでは、会期の終了した３つの企画展について所見を述べる。

夏期企画展「平城宮跡 今・昔―岡田庄三写真展―」（2010.7.10～8.31）　平城宮跡を半世紀以上にわたり撮影してこられた、地元佐紀町在住の写真家岡田庄三氏の写真展である。会場には、昭和30年代の平城宮跡の写真と、同じ場所から撮影された現在の写真を並べて展示し、今と昔の姿を比較できるようにした。

メインの展示物は写真であるが、展示が平面的にならないよう、写真パネルの一部を天吊りにして並べたり、平城宮跡のイラストマップを平置きし、撮影位置を表示したりした。また昭和30年代のカメラや、岡田氏ゆかりの品なども公開した。そのほかコーナーの一角に「わたしの平城宮跡」と題した掲示板を設け、各々が印象に残る平城宮跡の景色を、エピソードも交えて入館者に自由に記入していただいた。

当企画展は展示内容から地元の方々に是非ご来場いただきたいと考え、都跡地区の自治連合会長のご協力を得て、近隣町内の回覧板で各世帯にチラシを配布していただいた。また企画展終了後、都跡小学校の創立100周年の催しとして小学校で写真パネルの一部が展示された。こうした地元とのつながりも、今後大切にしていかなくてはならないと感じた。

秋期特別展 平城宮跡発掘調査50周年記念「天平びとの声をきく―地下の正倉院・平城宮木簡のすべて」（2010.9.25～11.7）

研究所の平城宮跡発掘調査50周年を記念して開催した秋期特別展。資料館では過去３年にわたり「地下の正倉院展」と称し、秋の企画展として木簡の実物展示をおこなってきた。今回は、その集大成として平城宮・京出土の木簡を一堂に会した特別展を実施した。

300点余り（一期につき約100点）という数多くの木簡を展示するにあたり、形状が似ておりともすれば単調な展示になりがちな木簡を、いかにみせるか、ということが課題となった。そこで、史料研究室の意向で次のような方法をとった。

①コーナーごとに展示手法を変える：木簡の釈文内容をじっくり解説するコーナー、発掘や整理・分析状況を実感してもらうコーナー、木簡内容の背景をテーマごとにイメージしてもらうコーナーなど、異なる視点で区画構成をし、それぞれのコーナーごとに照明や壁紙の色味を変え、メリハリのある展示を心がけた。

②木簡以外の資料を展示する：木簡研究の歩みのコーナーでは画期となった木簡群発見の新聞記事や調査風景写真を、発掘調査のコーナーでは木簡と共伴した土器や瓦を展示し、イメージを膨らませた。臨場感を出すため、平城宮の航空写真に木簡出土地点を重ねた床展示や、木簡の水漬け保管棚の再現、現場から持ち帰った木簡を含む土入りコンテナをそのまま展示した。

③体験要素を取り入れる：赤外線装置の透影、記帳（調書）作成、文字の解読挑戦など、来館者が楽しめるよう工夫した。子ども向けのワークシートも作成した。

冬期企画展「測る、知る、伝える―平城京と文化財―」（2010.11.26～2011.1.17）　国土地理院近畿地方測量部からの呼びかけで合同主催が実現した、地理と測量の観点から平城京と文化財を読み解く企画展である。

この企画展では、国土地理院をはじめ他の関係機関のご協力により、奈文研の単独主催では成しえなかったであろう展示やイベントを実施できた。国土地理院撮影の

表１　アンケート調査集計

※数値は％

【在住地】

	奈良市内	奈良県内	その他近畿	北海道東北	関東	中部甲信越	中国四国	九州沖縄	海外	その他
夏期	6.6	8.4	19.7	1.4	41.3	11.1	5.2	3.0	0.8	2.5
秋期	12.1	15.4	36.4	1.5	11.7	8.1	2.9	1.2	0.1	10.4
冬期	26.0	7.9	29.9	2.8	17.5	6.2	4.0	2.8	0.0	2.8

【来館回数】

	はじめて	2回以上	5回以上	無回答
夏期	82.6	10.8	4.7	1.9
秋期	68.8	16.3	9.9	5.0
冬期	63.3	14.7	16.9	5.1

【年齢層】

	小学生未満	小学生	中学生	高校生	大学生	20代	30代	40代	50代	60代	70代以上	無回答
夏期	1.3	24.2	11.3	5.3	5.1	7.1	8.9	17.6	10.6	6.5	2.0	0.1
秋期	0.5	27.9	7.7	2.3	3.2	4.8	7.3	9.1	10.3	15.7	9.9	1.3
冬期	0.0	18.6	3.4	1.1	12.4	7.3	10.7	6.8	14.1	15.8	9.0	0.6

【来館目的】

	近所だから	学校の学習	観光	歴史に興味	その他	無回答
夏期	4.6	7.0	53.2	25.1	9.0	1.2
秋期	6.9	22.4	27.4	33.4	8.1	1.8
冬期	9.9	17.0	31.9	31.9	6.6	2.7

※記入数 / 入館者数（回収率）…夏期企画展：789/38,443 名（2.0%）、秋期特別展：972/92,394 名（1.1%）、冬期企画展：177/20,282 名（0.9%）

オルソ画像を60面つなげた空中写真に、平城京の条坊を重ねた床展示は、入館者に好評を博した。遺跡・調査技術研究室が、大学や研究機関に呼び掛けたポスターセッションは、40件を超える参加があり、空間情報科学や測量・計測技術を利用した文化財研究の様々な事例を紹介できた。12月19日に実施した記念講演会では、国土地理院と奈文研双方の職員が講師を務め、地理や測量に関心のある方の参加がみられた。同日、同時開催イベントとして、奈良県測量設計業協会主催の野外測量体験も平城宮跡でおこなわれた。

他機関との共催で企画展を開催したのは、今回が初めてであったが、旧資料館で通常よくおこなわれてきた歴史展示の枠を超え、展示や企画内容にさらに広がりを持たせることが可能となり、新たな入館者層の獲得にもつながったといえる。

４　入館者調査

資料館では企画展の会期中、入館者を対象にアンケート調査を実施した。ここでは、先述の企画展の集計結果をもとに、入館者の動向を読み解く。

在住地　夏期企画展では、関東地方（特に東京）からの来訪者が近畿地方を上回っている。秋期になると、関西圏（奈良・大阪）からが圧倒的に多くなり、冬期にはその中でも、奈良市内からの入館者が目立つ。徐々に近隣地域の在住者に移行しているのがわかる。

図６　冬期企画展のようす

年齢層　以前からの傾向として、小学生の校外学習に活用されることが多かったが、夏期はそれに加え20 ～ 40代の入館が目立つ。しかし、秋期以降は50 ～ 70代の年配層が増えてきている。

来館回数　夏期は、圧倒的に初めての来館が多い。秋期・冬期と回を重ねるにつれリピーターが増え、何度も足を運んでいる人が訪れるようになる。

来館目的　夏期は観光目的の人が中心だが、秋期以降は歴史に興味があり来館する人が多くなる。秋期・冬期になり奈良県内の在住者が増えるにつれて、近所だから来館したという人も多くなる。

今回の調査では、1300年祭の真っ只中に開催された夏期企画展、祭終盤に開催された秋期特別展、祭終了後に実施した冬期企画展と、それぞれの会期時期により入館者層にあきらかに違いが認められた。1300年祭の期間中は、遠方から初めて来館した観光客が多かったが、その後は奈良県を中心とする近隣地域にまとまり、歴史に興味のあるリピーターが増え、年齢層も上がる。リニューアル前の正確なデータがないので推測の域を出ないが、1300年祭終了後は平常時の入館者層に戻りつつある傾向がみてとれる。

５　まとめ

リニューアル、企画展の準備と、この一年は怒涛の日々であった。入館者はリニューアル前の４倍におよび、展示の満足度も良好であった。今後もこの状態を維持できるよう、入館者の状況を把握するとともに、創意工夫を重ね質の高い展示を目指していきたい。　（渡邉淳子）